第四章　廣井勇博士年譜

一八六二年（文久二年　一歲）

九　月　二　日　高知藩士廣井喜十郎長男として土佐國高岡郡佐川村に於て出生數馬と命名さる

一八七〇年（明治三年　九歲）

十　月　九　日　父喜十郎歿す

十一月　三　日　家督を繼ぐ

同年佐川より高知に移る

一八七二年（明治五年　十一歲）

叔父片岡利和に伴はれて上京同家の書生となる

一八七四年（明治七年　十三歲）

三　月　東京外國語學校英語科下等第六級に入學す

十二月　英語科獨立して東京英語學校となる

英語學校を退きて工部大學豫科へ轉ず（年月不詳）

一八七七年（明治十年　十六歳）

七　月　九　日　官費生申付候事　札幌農學校

片岡家を辭して札幌農學校へ入學す

一八七八年（明治十一年　十七歳）

六　月　二　日　札幌に於て米國宣教師エム・シイ・ハリスよりバプテスマを受け信仰生活に入る

一八八一年（明治十四年　二十歳）

七　月　九　日　札幌農學校卒業

七　月二十七日　御用掛申付候事準判任官月俸金三十圓　開拓使

同時に民事局勸業課勤務となる

十一月二十一日　煤田開採事務係申付候事　開拓使

同時に鐵路科勤務となる

札幌市内白官舍を借り同窓生と共に獨立基督教會を開設す

一八八二年（明治十五年　二十一歳）

二　月　開拓使廢せらる

十一月十八日　準判任御用掛申付候事月俸金三十圓　工部省

北海道より東京に移る

一八八三年（明治十六年　二十二歳）

一　月十二日　任工部六等技手月俸金三十圓　工部省

三　月十三日　鐵道局出勤申付候事　工部省

三　月十四日　東京高崎間建築從事申付候事　鐵道局

十　月　三　日　依願免本官　工部省

十二月　十　日　横濱解纜の City of Rio de Janeiro 號に便乘渡米す

一八八四年（明治十七年　二十三歳）

一　月二十日　北米合衆國政府ミシシッピー河改良工事雇員（月給八十弗）となり八月に至る

九　月　十　日　シー・シェラー・スミス工事々務所技手（月給六十弗）となり橋梁の設計に從事す

一八八六年（明治十九年　二十五歳）

一　月　二　日　北米ノーフォーク市 Nofork and Western 鐵道會社技手（月給六十弗）となり鐵道工事に從事す

九　月　三　日　Edgemoor 橋梁會社技手（月給六十五弗）となり、鐵橋の設計並に製作に從事す

十　月　十　日　祖母勇故國に歿す

一八八七年（明治二十年　二十六歳）

四　月　一　日　任札幌農學校助教　北海道廳

同　叙判任官一等上級俸下賜　北海道廳

同　獨逸國留學を命ず　北海道廳

九　月　獨逸カールスルーヘ府ポリテクニカムに入學土木工學を專修す

一八八八年（明治二十一年　二十七歳）

九　月　獨逸スツットガート・ポリテクニカムに入學土木工學を專修す

十　月二十五日　歸朝を命ず　北海道廳

最初の著書 "Plate Girder Construction" が紐育市ヴァン・ノストランド會社よりそのScience Series No. 95 として出版さる

一八八九年（明治二十二年　二十八歳）

四　月　一　日　獨逸國カールスルーヘ府及スツットガート・ポリテクニカムに於て土木工學及建築水利工學等の諸學科を研究しバウインジェニユルの學位を受領す

英佛獨の諸國を巡回して土木工事を視察す

七　月　歸　朝

九　月十一日　任札幌農學教授　內閣

同　叙奏任官四等賜上級俸　內閣

東京より母堂を迎へ札幌區北一條西五丁目に一戸を構ふ

一八九〇年（明治二十三年　二十九歳）

二　月十九日　北海道炭礦鐵道會社鐵道工事計畫取扱を命ず　北海道廳

五　月二十三日　北海道廳技師試補兼務を命ず　內閣

五　月三十一日　第二部土木課長の心得を以て事務取扱を命ず　北海道廳

八　月十一日　殖民課兼務を命ず　北海道廳

八　月二十二日　札幌農學校長不在中代理を命ず　北海道廳
十　月二十五日　兼任北海道廳四等技師　内務省
同時に奏任官四等に叙せらる
十一月　一　日　第二土木課長を命ず　北海道廳
一八九一年（明治二十四年　三十歳）
一　月二十四日　大井上綱子と結婚す
三　月三十一日　中級俸下賜　文部省
四　月　一　日　第二部土木課長を解く　北海道廳
同時に第二部勤務を命ぜらる
八　月十六日　六級俸下賜　文部省
十二月二十一日　叙從七位　宮内省
十二月二十七日　長女雪子出生
一八九二年（明治二十五年　三十一歳）
六　月　一　日　北海道廳文官普通試驗委員を命ず　北海道廳
六　月　十　日　北海道物産共進會審査委員を命ず　北海道廳
十二月二十二日　陞叙高等官六等　内閣
同　五級俸下賜　文部省
十二月　八　日　叙正七位　宮内省
一八九三年（明治二十六年　三十二歳）
四月十九日　任北海道廳技師兼札幌農學校教授　内務省
同　七級俸下賜
十二月二十七日　二女鶴出生
一八九五年（明治二十八年　三十四歳）
十　月十六日　六級俸給與　内務省
十一月　八　日　陞叙高等官五等　内閣
十二月　十　日　叙從六位　宮内省
一八九六年（明治二十九年　三十五歳）
一　月　七　日　長男剛生る

五月五日　五級俸給與　拓殖務省
六月十六日　函館港改良工事監督を命ず　北海道廳
札幌農學校工學科廢止さる

一八九七年（明治三十年　三十六歳）
四月二十七日　小樽築港事務所長を命ず　北海道廳
八月十四日　依願免兼官（札幌農學校教授）　内閣
八月二十四日　四級俸下賜　拓殖務省

一八九八年（明治三十一年　三十七歳）
四月十八日　陞叙高等官四等　内閣
六月二日　三女花生る
六月十日　叙正六位　宮内省
十月二十二日　北海道治水調査會員を命ず　北海道廳
築港前後編、工學書院より刊行さる

一八九九年（明治三十二年　三十八歳）
四月二十七日　工學博士の學位を授與す　文部省
九月二日　任東京帝國大學工科大學教授兼北海道廳技師叙高等官四等　内閣
同日文部省より土木工學第三講座の擔任を命ぜらる
同　本俸四級俸下賜　文部省

一九〇〇年（明治三十三年　三十九歳）
二月九日　震災豫防調査會委員被仰付　内閣
三月　秋田縣知事の委嘱に依り雄物川河口改良に關する調査を監督して十二月に至る
五月一日　陞叙高等官三等　内閣
六月　小倉市の嘱託に依り小倉築港に關する調査を監督して三十四年二月に至る
六月二十七日　港灣調査會委員被仰付　内閣
六月三十日　叙勲六等授瑞寶章　賞勲局
七月十日　叙從五位　宮内省

一九〇一年（明治三十四年　四十歳）
四月　臺灣總督府の委嘱に依り基隆及淡水の兩港を視察す

六　月　　靜岡縣知事の委囑に依り清水港を視察す

一九〇二年（明治三十五年　四十一歳）

九　月十八日　本俸三級俸下賜　　文部省

十二月　八　日　內務省所管事務政府委員被仰付　　內閣

十二月十九日　陞叙高等官二等　　內閣

一九〇三年（明治三十六年　四十二歳）

四　月　十　日　叙正五位　　宮內省

六　月三十日　四女京子生る

十二月二十六日　叙勳五等授瑞寶章　　賞勳局

一九〇四年（明治三十七年　四十三歳）

七　月　　渡島水力電氣工事の顧問となり四十二年十二月に至る

一九〇五年（明治三十八年　四十四歳）

六　月二十四日　叙勳四等授瑞寶章　　賞勳局

"The Statically Indeterminate Stresses in Frames Commonly used for Bridges"

紐育市ヴァン・ノストランド會社より出版さる

一九〇六年（明治三十九年　四十五歳）

一　月三十一日　二男嚴生る

五　月二十九日　御用有之韓國へ被差遣　　內閣

六　月　　韓國政府の委囑に依り仁川港埋築に關する調査を監督す

十二月　　高知縣知事の委囑に依り同縣下の諸港灣を調査して四十一年一月に至る

一九〇七年（明治四十年　四十六歳）

五　月　　青森縣知事の委囑に依り青森築港に關する調査を監督して四十二年三月に至る

日本製鋼所の囑託に依り室蘭港に於ける埠頭の設計を監督して四十一年六月に至る

六　月二十日　賜本俸四級俸　　文部省

六　月二十九日　港灣調査會委員被仰付　　內閣

八　月　　秋田縣知事の委囑に依り船川港に關する調査を監督して四十一年六月に至る

一九〇八年（明治四十一年　四十七歳）

五　月十四日　御用有之歐米各國へ被差遣　内閣
六　月十五日　依願免兼官（北海道廳技師）　内閣
六　月二十日　叙從四位　宮内省
六　月二十四日　北海道に於ける港灣の調査並に築港工事の顧問となる（継續）
一九〇九年（明治四十二年　四十八歳）
六　月二十八日　叙勳三等授瑞寶章　賞勳局
七　月　歐米視察より歸朝
一九一〇年（明治四十三年　四十九歳）
五　月　鬼怒川水力電氣工事の顧問となり大正三年二月に至る
十二月　南滿洲鐵道會社の囑託に依り大連旅順及營口の諸港を視察す
一九一一年（明治四十四年　五十歳）
四　月十四日　鐵道院の囑託に依り關門架橋の設計を監督す（継續）
八　月　大東岬に於て波力利用の實驗を開始す
十二月　七　日　陞叙高等官一等　内閣

十二月二十六日　賜本俸三級俸　文部省
一九一三年（大正二年　五十二歳）
八　月十一日　叙正四位　宮内省
一九一四年（大正三年　五十三歳）
十二月二十五日　依願震災豫防調査委員被免　内閣
一九一五年（大正四年　五十四歳）
五　月　東京府知事の委囑に依り千住及六鄕橋梁の設計を監督して五年十月に至る
一九一六年（大正五年　五十五歳）
七　月三十一日　叙勳二等授瑞寶章　賞勳局
一九一七年（大正六年　五十六歳）
七　月　鐵道院の囑託に依り門司若松の兩港に於ける載炭に關し調査して八月に至る
九　月　五　日　賜本俸二級俸　文部省
一九一八年（大正七年　五十七歳）
九　月十四日　二男嚴病死す

十月十日　叙從三位　宮内省

十一月二十六日　東京帝國大學評議員を命ず　文部省

一九一九年（大正八年　五十八歳）

五月二十七日　賜本俸一級俸　文部省

五月三十一日　本俸金五百圓加賜　文部省

六月十四日　依願免本官（東京帝國大學教授）　内閣

六月三十日　叙正三位　特旨を以て位一級被進　宮内省

一九二〇年（大正九年　五十九歳）

二月六日　勅旨を以て東京帝國大學名譽教授の名稱を授く　内閣

十一月二十五日　學術研究會議會員被仰付　内閣

一九二一年（大正十年　六十歳）

支那上海港改良技術會議へ日本代表委員として出席す

一九二三年（大正十二年　六十二歳）

一月四日　母堂寅子八十九歳の高齢を以て市ヶ谷の自邸に逝く

十月十八日　帝都復興院評議會評議員被仰付　内閣

土木學會震害調査委員會委員長に推擧され河川灌漑堤防運河港灣橋梁建造物上下水道瓦斯工事鐵道軌道水力電氣道路の各部門に亘り其調査を統率す又米國土木學會の日本に於ける關東大震火災調査委員會委員長に推擧さる

一九二四年（大正十三年　六十三歳）

四月十日　帝國經濟會議々員被仰付　内閣

一九二七年（昭和二年　六十六歳）

五月　『日本築港史』丸善株式會社より出版さる

一九二八年（昭和三年　六十七歳）

十月一日　午後十時十五分薨去

同　叙勲二等授旭日重光章　賞勲局

十月四日　東京市牛込區仲之町十七番地の自邸にて基督教儀式により葬儀執行さる

十二月一日　東京市營多磨墓地甲種第六區八の側十五番『廣井家總塋』に埋葬さる

故廣井勇工學博士記念事業會東京帝國大學工學部に設立さる

一九二九年（昭和四年）

十月十二日　胸像小樽市公園東山に建設され除幕式擧行さる